

「家の土台」

2015年06月10日

ルカによる福音書 6章46節～49節。「わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているかを示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、揺り動かすことができなかった。しかし、聞いても行わない者は、土台なしで地面に家を建てた人に似ている。川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方がひどかった。」

主イエスは私に対し「主よ、主よ」と信仰深そうに呼びかけながら、どうして私の言うことを行わないのかと問いかけている。そして、主イエスの下に来て、言葉を聞き行う人を次のように譬えている。「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、揺り動かすことができなかった。」イスラエル旅行に行った時、荒れ野をバスで走った。すると、コンクリートの道路が洪水によって流されている場所があった。地下の岩盤は固いが、その上に土砂が積もっているため、大雨が降ると、雨は地下に浸透せず、洪水になって地表の土砂を押し流す。その力が道路を壊したのである。この光景を見た時、主イエスの譬えの意味が分かった。イスラエルでは家を建てる場合、積もった土砂の下の岩まで届く支柱を立てて家を建てる。そうすると、大雨が起こす洪水にも耐えて、揺り動かされることはないのである。主イエスの言葉を聞いて行う者は、これに似ていると言う。

反対に、聞いても行わない者は土砂の上に建てた家のように川の水が押し寄せるとたちまち倒れ、そのひどい壊れ方に似ていると言う。聞いていた民衆は主イエスの語られた譬えは自分たちが日常的に経験することであったので、よく理解できたであろう。

ルカ福音書8章21節に「するとイエスは、『わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである』とお答えになった」と書かれている。主イエスは、私の言葉を聞いて行う者は岩の上に建てた家のように洪水が来ても流されない、また、神の言葉を聞いて行う者が、私の母、私の兄弟であると語り、聞いて行えと諭し、命じている。

ところが、主イエスの言葉、神の言葉を聞いても行い得ないというのが、私たちの現実である。主イエスの言葉は「みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」と言っているように、外面を取り繕うのではなく、深く人の内面を見据えた教えである。これを倫理的要請として聞いた場合、応えられる者は一人としていない。このギャップをどのように考えたらよいのであろうか。

パウロはガラテヤ書2章19節b～20節bで「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と書いている。主イエスを信じ、義とされた者はキリストの十字架と共に罪に死に、もはや私ではなく、私の内にキリストが生きていると言う。主イエスの言葉、神の言葉を聞いて行うことができるとすれば、内に生きてくださるキリストによってはじめて可能になるのではないか。パウロの語る言葉を希望にして主イエスの言葉に聞き入りたいと思っている。信仰は自分の力を根拠にするのではなく、キリストの働きに寄り頼むことである。